
臨床犯罪心理学

加害者理解の「粹」と介入の「技」

門本 泉著

金剛出版, 四六判 288 頁, 3,960 円, 2025 年 7 月刊

(日本女子大学名誉教授) 岡本吉生

本書は、一定の法的手続を経て少年鑑別所や刑務所に収容された非行少年や犯罪者に関する小論文を、心理臨床の観点から一冊の書物としてまとめ再構成したものである。優れた論考でありながら「バラ」ではなかなか目にする機会の乏しかった論文を、こうして一つの書物にまとめてもらえると、多くの人たちに手に取ってもらいやすい。「塀の中」という未知の世界でどのような心理臨床がなされているのかを知ることは、一般の人だけでなく心理臨床の専門家にとってもありがたいと同時に大変興味深い。

本書のユニークな点は、まず、心理臨床の専門家でもあまり実態を知らない非行少年や犯罪者の、しかも塀の中での実像を紹介していることが挙げられ

る。非行少年や犯罪者と言えば、乱暴でうそつきで手に負えず、自分のしたことを反省しないというステレオタイプな理解をする者が多い。彼らは自分たちとは違う世界に住んでいるモンスターだと考え、それ以上の理解をしないで済ませてしまうことも少なくない。しかし実際には、彼らのほとんどは世の中で生きづらさを感じ、内面には抑うつや絶望感すら抱き、自殺のリスクと隣り合わせの人生を送っている。彼らの本質を知れば知るほど、一般の心理臨床でよく出会うクライアントたちと変わらない悩みがあることを本書は教えてくれる。

未知の世界である矯正施設で、どのような処遇や心理支援がなされ、そこで働く心理職がどのような悩みやジレンマを抱えているのかを垣間見れるのも本書の特徴である。これまでは、矯正施設の職員や専門家が自らの悩みを文字にして世に問うことはあまりなかったように思う。それは、塙の中で働く人間が抱える悩みや戸惑いを世間一般に知らせることが、矯正施設の信頼や安定性を揺るがすことになりかねないという、一種の国家組織に対する忖度によるものではないかと推察するが、その意味では本書はチャレンジである。

しかしながら、矯正施設での心理臨床というのは、厳格なルールの束があり、それに支えられてこそ成立する仕事であることを本書ではさまざまな個所で触れている。むしろ、厳格なルールの背後に潜む収容者の情緒やたくらみをどのように巧みにまた誠実に扱えるかという課題にこそ、臨床犯罪心理学の真骨頂があることを節々で感じることができる。特に、本書の中後半で取り上げられている「罪と罰」「うそと真実」「法と心理」といった章では、「塙の外」ではあまり顧みられなかった心理臨床の難題を著者なりの視点でわかりやすく紐解いている。

最近では、SNSの普及などの影響もあってか、犯罪と隣り合わせのいわばグレーゾーンの事例が増えている印象がある。心理臨床家がそのような事例を前にしたとき本書はたいへん参考になる一冊にちがいない。